

算数

算数科における指導の重点(身に付けさせたい力) ※学習指導要領に照らし合わせて	
ア 知識及び技能	イ 思考力、判断力、表現力等
数量・図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解すること。他の学習や生活の場面でも活用できること。	数量・図形及びそれらの関係などに着目し、問題を捉えたり、考えたりして、自分の考えを表現すること。

	児童・生徒の学力の状況(課題)	授業における具体的な手だて	手だての実施時期	成果検証(2月)
第1学年	<ul style="list-style-type: none"> 差や違いを求める計算を正確に立式したり、計算したりすることが難しい。ア 問題文を正しく読み取れないために、正確に立式することが難しい。イ 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の冒頭の時間で、10の合成分解に慣れる時間を設け、計算力を養う。ア 問題文の中の数字や大切な言葉に印を付けることにより、問題文の理解につなげる。イ 	<ul style="list-style-type: none"> 常時 毎単元 	<ul style="list-style-type: none"> 10の合成分解に加えて、計算カードに繰り返し取り組んだため、計算の力が向上した。 数字や言葉に着目すると良いという意識が高まった。正しい立式に関しては、課題が残る。
第2学年	<ul style="list-style-type: none"> 時刻・時間の理解が十分ではない。ア 文章の内容が読み取れず、問題場面を正確に捉えられないため、解決する見通しが立てられない。イ 自分の考えや意見を言葉や図で表現することが難しい。イ 	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習終了後も、宿題や日常的な課題として繰り返し指導を行う。ア 児童が理解しやすくなるための視覚的な教材を活用して理解につなげる。ア 問題場面をイメージさせやすくなるために、文章内の聞かれていること、分かっていることなどの言葉にラインを引かせる。イ 発表の話型を決め、算数以外の教科等においても取り組み、定着を図る。イ 	<ul style="list-style-type: none"> 毎単元 毎単元 毎単元 毎単元 	<ul style="list-style-type: none"> 時刻、時間については、かなり定着が進んだ。 文章からの立式については、個人差も大きいですが、場面をイメージすることが難しい児童が多く、課題が残る。 自分の考えや意見を言葉や図を使って発表することについては、どの児童も難しく、多く課題が残るため、次年度も重点的に指導する必要がある。
第3学年	<ul style="list-style-type: none"> 量や測定についておよその検討をつけることに課題がある。ア 計算のたしかめに課題があり、説明することに課題がある。イ 	<ul style="list-style-type: none"> およその検討が付けられるように、具体物や半具体物を準備し、実感を通した指導を行う。ア 記号や数のまとまりに着目させた指導の徹底により、計算を正確にさせる指導を行う。イ 	<ul style="list-style-type: none"> 毎単元 常時 	<ul style="list-style-type: none"> 具体物や半具体物を使用することで、重さを物に例えるなど、量感を身に付けることができた。 四則計算の式や文章題の意味について、授業中に確認をした。また、練習問題に多く取り組ませたが、まだ式の意味や正確に計算することには課題があるため、引き続き式の意味を説明させることや反復学習が必要である。

第4学年	<ul style="list-style-type: none"> ・四則計算や単位の換算などの既習事項の定着に課題がある。ア ・式の意味を説明したり、図と式を関連付けて考えたりすることが苦手な児童が多い。イ 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京ベーシック・ドリルを活用し、既習事項の定着を図る。ア ・毎時間、授業初めに既習事項を振り返り、本時で考えるための手掛かりをもたせる。ア ・立式の根拠を説明したり、他の児童の考えを説明したりする場面を設ける。イ 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元 常時 毎単元 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎週東京ベーシック・ドリルに取り組み、学習習慣は身に付けることができた。四則計算に苦勞している児童は、まだ定着がはかられていないため引き続き取り組んでいく必要がある。 ・めあてを立てる際に、既習事項の確認をし、見通しをもたせることができた。問題に取り組める児童が増えた。 ・集団検討場面で、他の児童の考えを聞いたり、立式の根拠を説明したりする時間を設けた。問題に対する理解が深まった。
第5学年	<ul style="list-style-type: none"> ・体積を計算で求めることが苦手である。ア ・小数のわり算が苦手である。ア ・文章問題を読み取ったり、図や式などを用いて考え、表現したりすることが苦手な児童が多い。イ 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京ベーシック・ドリルを活用し、既習事項の理解を深めさせる。ア ・図やグラフ、表などを活用して自力解決で演算決定をする時間を設定する。イ 	<ul style="list-style-type: none"> 毎週 毎単元 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の学習の時間に東京ベーシック・ドリルを活用することで、計算への苦手意識が軽減された児童がいる。 ・授業内で自力解決の時間を確保することで、自分の考えを表現できるようになってきた。
第6学年	<ul style="list-style-type: none"> ・四則計算、図形、数量に関する基礎的な知識・技能が定着していない児童が多い。ア ・文章題や日常の場面から課題を捉える力、問題場面を捉える力が十分に備わっていない。イ 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京ベーシック・ドリルやアプリケーションの「ミライシード」を活用し、既習事項の定着を図る。ア ・問題場面を図や表などに表すことで、数量の関係を整理してから立式させる。イ 	<ul style="list-style-type: none"> 毎週 毎単元 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な計算技能が身に付いている児童が増えてきた。 ・図や表を使うように誘導すると書こうとする児童が増えてきたが、正しく数量関係を表すことに課題が見られる。

<p>■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人一台端末等 ICT の効果的な活用について</p>	<p>■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について</p>
<p>1・2年 タブレット端末を使って具体物を操作したり、課題などをわかりやすく確認できるようにしたりする。【重点:個別】</p> <p>3・4年 具体物の操作とICTによる視覚的な支援で理解しやすくしたり、それを使って説明させたりする。【重点:個別】</p>	<p>1・2年 授業の導入で、既習事項や前時との違いなどを想起させたり、学習の最後に大切なことをノート等にまとめたりする。</p> <p>3・4年 学習の振り返りの時間を設け、次時につながるキーワードや自己の課題をノート等にまとめる。</p> <p>5・6年</p>

5・6年

既習事項を生かして問題を解く場面において、タブレット端末を使って個々の意見を表し、交流する。【重点：個別・協働】

児童とめあてを共有し、めあてを自分のものとして捉えさせる。

振り返りをさせるときに、この学習で何ができるようになったのか視点を明確にする。